

ふるさと見て歩き

第17回

緒川地域の生活改善運動



千田地区の共同霊堂

や家庭といった個人の生活に直接関係するところまで及び、環境衛生の改善、冠婚葬祭の簡素化、家族関係の民主化、迷信や因習の排除などが主眼となりました。

当時の広報誌を見ると、正月やお盆を新暦で迎えようという暦の一本化や休日の定まっていな

服して便利で快適な生活を」という思想が流れていたようです。そしてこの運動は昭和五十年前後に再燃することになります。

千田田園都市構想

緒川地域の中でも栃木県に接している千田地区は道路や水道等インフラ整備の遅れが指摘されていた地域でした。昭和四十六年八月、当時の岩上二郎知事が千田地区を訪れ、区民の意見を聞く「知事と語る会」が開かれました。これが契機となり、田園都市建設推進協議会モデル地区として事業を進めていくこととなったのです。田園都市とは、「僻地」（都市から離れた交通の不便な地）を中心に住宅をはじめと

する居住環境を整備し、地域を活性化するために選定された地区です。当時、岩上知事の下で全県的に田園都市建設に関する運動が盛り上がり、機運を見せており、他市町村でも同様な取り組みが展開されていました。千田ではそれらの自治体にも数回視察に行き、また受け入れも行なうなど積極的な活動がされていました。

この計画の一環として田園都市センターおよび共同霊堂の建設、道路改修、地区独自の下水道設置（緒川地域で最初）などが行なわれました。昭和五十一年に田園都市センターが完成し、自宅で行なわれていた結婚披露宴や葬儀の会場として安価に貸し出されました。その後、共同霊堂が地区共有の霊園として作られます。当所は墓苑の計画でしたが、当時、土地は農地として重要なため余裕がなかったことに加え、墓石の競争になつてしまつては生活改善運動の方針に反するという憂慮もあり、納骨堂という形で完成をみました。

知事の提唱による山村改善の都市構想が、生活の民主化・簡素化と連動する形で他地域にはない大きな運動となったのが千田地区の特徴といえます。霊堂は現在でも地区で管理が行なわれ、月一回の清掃、建物の修繕などが定期的に行なわれています。千田ではこれらの建設費用を自治体と地区が

共同で担ったため、七十戸の家庭にそれぞれ分担金が割り当てられました。返済が済んだのはつい最近のことだといえます。当時としては上水道の完備は渇水に左右されない危急の願いであった半面、分担金は過重であり、区民の手による運営には大変な苦労があったようです。各世帯での高齢化、若年層の都市への流出が進む中で霊堂等の運営に参加できなくなる家も増えています。三十年を経て、地域運営の変化に直面しています。

※千田区長蓮田洋之氏、富子氏に聞き取りのためご協力をいただきました。（歴史民俗資料館）



千田地区で管理している田園都市センター関係資料（一部）

新生活運動の流れから

戦後、あらゆる側面から民主化政策が進められる中で、「新生活運動」または「生活改善運動」と呼ばれる運動が家庭生活のレベルから起こりました。昭和三十年の鳩山内閣から政府としても取り組みが始まったもので、それまでの生活形態の形式ばった慣習や非効率な様式を廃して合理的で民主的な生活習慣に改めようという運動です。新生活運動による民主化の流れは、地域